

『現代中学教育』一九六六年十月(発行元不明)

中学校における選抜問題

矢口 新

一

最近、高校入試問題と中学校教育正常化—正常化というのは何を意味するのかよくわからないが—は新聞紙上にあらわれた二つの大きな教育問題である。この問題についてはさまざまな論議がかわされ、また対策もあらわれ、それに対してまた新しい反応があり、なかなかにぎやかなことであるが、この動向を見ていると、高校選抜の問題が中学校教育に対してどのような影響をもっているかが極めて明らかに認識される。

まず非常にはつきりした一般的認識は、高校選抜が中学校教育を正しい方向に動かすものとはなっていないということである。果たしてそうかどうかはもつとよく検討してみないとわからないけれども、そういう認識は極めて一般化していると言つてよさそうである。つまり入学試験のための勉強という

ものが、教育というものをゆがんだ姿にする原動力だということであろう。そこでこの条件をかえることによつて、教育のゆがみがなおるといふ理くつになる。ではどういふふう

に条件をかえるのか。これを理くつとしてでなく、実際に教育界がどう処理したかという点からみると、試験科目の数をへらすという形で条件の問題を考えているということになる。もつともへらさなくともよいという意見もあるようであるから、そういう意見は、試験科目数をどうするという考え方とは根本的にちがうのかも知れない。しかし大勢として試験科目の数をへらすという方向にむかっているということもほぼまちがいないところであろう。

ところでこれに対して中学校側の反応がまたさまざまである。たとえば、科目をどれとどれにするかをあらかじめ発表しておくべしという意見もあれば、科目の数は明らか

にしてもよいが、種類そのものは、試験直前に発表すべしという意見もある。またたとえば、三ないし五科目であつてもよいが、それぞれの高等学校で独自の科目を定めるべきで共通にする必要はないという意見もある。また科目の種類によつては、その試験範囲までも規定せよという意見もある。こういう意見をもつとつとつあがるいとまもないし、必要ももちろんないけれども、要するに試験科目というものが条件の大きなものと考えられているのである。

もうひとつの問題は内申書の問題である。内申書を重視せよという意見は大勢を占めているといつてよい。しかしそのためには内申書の形式について研究をする必要があるという意見が多い。その意見の根底にあるのは内申書に信頼をおかないといういわゆる内申書不信感である。その不信感もひとつは学校格差という点から出ているものと—表面上はこれが多い—むしろ内申書というものに対する不信感—それは内申書を記入する人間ひとりへの不信感も含んでいる—がある。またそれと反対に、内申書の重視でなく、内申書のみによれという意見もないではない。つまり試験廃止論である。それに対する反論もまたさまざまなものがある。全体としては内申書だけでは、どうしても選択で

きない場合が生じるというのである。その具体的理由もいろいろあるのである。

最後に学校群という問題が出ている。これは志望の学校を群としてとらえようという考え方である。この考え方の根底には、学校格差の問題を処理しようという考え方があつた。つまりよい学校、わるい学校——わるい学校というのは言葉がわるいが、比較の意味で使う——言いかえれば有名校といったものとそうでないものとの差をなくしようというものである。そういうふうに分けて志望するというのが根本の考え方であろうが、しかし、現実の学校群のつくり方には、それが徹底されているわけではない。言い方はわるいが、一流校群二流校群というように、群をつくつて、現実にある評判を明確にしたというふうになつた。いきなりそうである。これに対してさまざまなところからさまざまな反応が出ている。概して有名校側から反対が出ていると言つてよいようである。いろいろ言い方はされるが、つまりは群として扱われることに対する不満だと言つてもよい。

さてこれと裏腹の問題として正常化という問題がある。つまり補習授業を廃止するという方向へのひとつの運動と考へてもよい。これはつまり補習授業というのはイコール試験準備だという考え方で、その試験準備の

補習授業を廃止するということが正常になるという考え方である。これも必ずしも多くの人が納得することではないらしい。補習授業とひと口にいうが、成績のわるい生徒の勉強をするような補習授業はわるいわけではなく、そういうのまで廃止する必要はないのだということもいわれている。しかしそういう補習授業と、試験準備の補習授業とを区別することはできないから——誰が区別するのかも問題であるが——正規の授業時間以外は絶対に授業をしてはいけないという考え方も出てきている。しかし試験であれ、なんでも勉強するのは悪いことではないではないかという意見もある。

さて以上のように見てくると、入学試験問題というのは、なかなか底深いというか、幅広いというか、ひとすじなわけはゆかない問題であつて、また教育に対して与えている影響といつても必ずしも、そう簡単にこれこれだと言えない問題のように思われる。

二

いったい高等学校の選抜があるから、それをめざして教育をするというのはおかしいことなのであるか。こういう問の出し方をすると答はずいぶんいろいろに出てくる。それは実は問の言葉があいまいだからである

が、そのことは、言葉の実体についてひとりひとりの認識がずいぶんちがうということでもある。選抜があるのは当たり前なのだから、そのために勉強するのは当然で、教師がそのための余分な努力をするのは教育者として当然ではないか。ただそれがあまりにも行きすぎるのは望ましくないけれども、などと言われると、全くもつともな意見だと言いたくもなるのである。それは現状は行きすぎだという意見でもあるようだし、そうではなくて、この位ならよいではないかという意見のようにも聞こえる。

こういう理くつで考えると、問題は余りないようにも見える。補習授業などというのも行きすぎでなければやつてよいし——殆ど親が賛成するのだから行きすぎではあるまいという意見もある——あまり気にすることはないようである。それどころか、生徒に勉強させるむちの一種——あるいは賞かも知れない。入学のよろこびを目ざすのだから——であるのだから、高校選抜は絶対必要なのという考え方もなりそうである。つまり高校選抜試験は中学教育にとつてよい刺激剤だということになるのである。

こういう考え方をつきつめれば試験をなくするという考え方は許されないことになろうし、試験こそ中学校教育を墮落させない

でおく歯どめの役目をしているものだと
いうことにもなる。この考え方にはおかし
いところがあるだろうか。

試験のために勉強するのはよくないこ
とだろうか。これに対しては、なかなか簡単
に答は出ないのではないか。よくないとい
つても現にそれがあって、それが自分の生
涯と関係があるとなればそれを目ざして勉
強するのは当たり前ではないか。よいとかわ
るのかの問題よりも前に、そういう事実が
あるとも言える。よいか悪いかを決する前
に、もしわるければそれはやめるしかなく
いことではないか。ある限りはそのために
勉強するというのは、これは当たり前では
ないか。こう考えるのは極端な考え方であ
るか。

試験のために勉強するのはわるい、勉
強はそういうことでやるのではない、とい
う意見が正しいとするなら、試験はやめ
るべきであるろうというのは極端な意見だ
ろう。試験はあれこれ、試験のためだけ
の勉強はしないという勉強の態度をつ
くりあげるほかに、それができる見通し
があればよい。人間の態度として、極
端論を撤回してもよい。そういう態度が
あればよいこともわかるし、

そういう態度が形成できないとはい
えないであろう。ただそれは教育の問題
である。その教育は今やっている教育、あ
るいはいままでやってきた教育とは、全
然ちがう教育であるろうとは想像があ
らう。何故なら今の教育はそういう態
度とは反対の試験のために勉強する人
間をつくらせているのであるから。つま
り教育がかわらなければ、だめだとい
うことになる。これは面白い結論だと思
う。教育を改めなければ、今の試験勉
強のよくない姿を改めることはできな
いであろう。そうであれば、試験をやめ
る以外、手はないであろう。

教育を改めなければ試験勉強がなくな
らないうこと。つまり教育を改めること
が試験勉強をなくさせるということは、
示唆的な思考の方式である。いったい
試験がゆがんでいるのでなく、ゆがんだ
教育が試験勉強を生み出しているのは
ないか。高校の試験が中学校教育をゆ
がめているという認識は極めて一般的
で、殆どどの人が疑っていないところ
であるが、実は本末をまちがえている
のではないだろうか。教育の姿を本物
にするのがさきで、それによって、ゆ
がんだ試験を改めるといふように考
えるべきではないだろうか。

三

現在考えられている試験対策によ
つて、つまり科目の数をへらすことによ
つて、人々はいったい何を期待してい
るのだろうか。試験科目からはずされ
た教科の教育はどういう教育になるの
だろうか。教師はいつかどうい
う考え方をしているのだろうか。これ
も反応はさまざまである。試験科目
からはずされた教科は主要科目でな
いと宣告されたも同然で、これでは
生徒に自信をもって教育できないと
ひがんでいる教師も多いであろう。も
ちろんその反対にこれからは本
当の教育ができるという教師もい
ることは確かである。前者は高校の
試験があることは中学校教育をより
よくするという考え方の人であ
ろう。この人々はだから現在の
対策に根本的に反対の人とみることが
できる。おそらく全科目の試験を
主張するのでなければ首尾一貫
しない。

試験科目からはずされた教師がそれ
で本当の教育ができると考
えるのもおかしな話である。それ
は試験科目を犠牲にすることに
よつて自分の教科だけを考
えようという考え方、試験科目を
三科目とか、五科目にする
という方針を出した人は、
こういう二つの考え方とはど
こがちがうのであ
らうか。前二者

のどちらでもないとするといったいどうい
う考え方になるのであろうか。

試験をするということをご否定しないこと
は確かである。それにもかかわらずある教科
の試験をはずすというのは、矛盾ではないか。
試験をしないというのは、試験をすることが
よいという考え方からすれば、いけないとい
うことになる。ある教科の試験をはずすとい
うのは、その教科の教育を墮落させることにな
りほしくないか。それなのにどうして試験を
しないことが認められるのか。

これは要するに入学試験が条件で、教育が
ゆがんでいるということではないというこ
とであろう。そういう論理のもっている矛盾
か、そういう論理をもとにした対策の矛盾で
ある。

いったい試験をなくするとか、少なくする
とかで教育が本当の姿になると考えるのは
おかしいことである。今のような教育をすれ
ば、必然的に今のような試験を生み出すので
ある。それが入学に際して使われるから入学
試験となるのである。今行なわれている試験
——テストと言いかえてもよい——は今の教
育と一身同体である。それは単にテストの形
式、たとえば、〇×式というようなことをい
うのではない。むしろその根底にある考え方
である。それは教育の根底にある考え方その

ものである。それは教育観そのものであり、
教育の目標観であり、更に内容観であり、方
法観である。教育の効果というものの見方で
あり、それを具体的に表現した試験の方式の
諸相であり、それらがひとつの全体としての
問題なのである。それら一切が体質的改善を
とげないでは、入学試験の問題は解決しな
いと言わなければならない。

四

教えたことをおぼえているかをしらべて
みるのがテストであるというのは極めて常
識的な言い方だが、この常識的な言い方が今
のテストを支配しているといつてよい。教え
ることがあつて、それをおぼえるということ
があつて、そこに教育がなり立つというので
ある。教えることとこの知識と言いかえ
てもよい。技能とか態度とかという言葉であ
らわすものも内容の実体は知識である。それ
を教えるというのは与えると言いかえ
かえてもよい。生徒の方から言えば受けとる
という言い方にしてもよい。受けとるとか、
与えるとかという言葉は、実は事物の授受に
使われる言葉なのである。そういう言葉は転
用されているのだが、そのことに気づかない
のである。

金を与えて受けとると同じように、知識も

与えることができ、受けとることができる
と考えられている。ここに大きな錯覚があるの
である。この錯覚が今の教育の形を生み出し、
教師の口うつしによって知識が生徒の方へ
移動するように考えられる。知識というもの
が人間からはなれてあるもののような錯覚
が生れる。それが試験という形をとつて、生
徒からはなれて紙の上に表現されると考え
る。教育の目標とか内容とかと言われるもの
は、そういうものと考えられているのである。

こういう考え方は人間の能力というもの
を見失わせてしまう。人間を見失わせる。人
間は知識をもる器である。この考え方から出
る教育の方法はまた当然現代の教育のよう
な形になる。知識をつめこむなどという言葉
があるように、人間はつめこまれる器でしか
ない。そういう器であるとすれば、器の大小
が問題である。いわば、大小の一色である。
人間の能力は多種多様に発達するものでは
なるといふ考え方は生れない。器の大小は
生れつき決まっていると考え、頭のよしあし
などという言い方があたりまえのようにな
る。頭のわるいのは勉強しても仕方がないと
考えられ、頭のよいものだけが学校に入り、
さらによい学校に入る資格があると考えら
れる。こうして入学試験は、当然あるべきで
あり、頭のよしあしをふるいわけるとし

てなくてはならないものと考えられるのである。

こういう思考の体系が問題なのである。教育とは人間の活動力、行動力を育てるためにあるのである。知識をもつという言い方であらわされる内容は、実は知的な行動力をもつことであり、それにも種々な方向があるのである。それは人間が生まれてから様々な環境の中で生活するうちにつくられてくるもので、環境のちがいのあることが、その活動力に様々なちがいを生み出させるのである。教育者はその時、その時のそれぞれの人間の能力を土台としつつ——それが個性というのである——それぞれの個性的能力をつくりあげるのである。

人間のそういう知的な行動力を育てるには、その人間の全知全能をフルに働かせる以外にない。その人間に適合した形で行動させることを考えなくてはならぬ。そういう意味では教育は常に個別的な教育なのである。あらゆる人間をそれぞれの個性において育てることであって、十把ひとからげに与えることではない。個別的な教育とは、また別な点からすれば、それぞれの個性がフルに活動することである。それはきびしい教育である。常に主体的に行動し、考え働くことが強制されなくてはならぬ。それは教育する者にとつ

てもまたきびしいものである。

テストによって、ふるいわけるのではなく、教育をすることの中で、それぞれの個性がフルに働くその姿の中にその人間の何ができ、何ができないかを見つけて次々と生徒を働かせる場を構成していくことが教育する者の働きである。それは別な意味で、四六時中の試験なのである。

こういう思考の体系の中で、内申書も意味があるのである。それを受けとるものが、次に何を教育するかを考える材料として内申書を受けとるのである。ふるいわけるための内申書であるから妙なものになるのである。内申書はふるいわけるのではなく、能力の分化をみるものなのである。

後期中等教育がいう教育の多様化とはこういう教育をいうのであって、頭のよいものは有名校に、頭のわるいものはつまらぬ学校や青年学級にということではない。しかし、こういう言い方をしても、それは単なる理想論でしかないようにしか現代人は考えない。それが明治百年来の日本人のあやまった思考の習慣であることに気がつかないのである。

教育がこのような形で正常化しなければ、試験科目をへらそうが、内申書を重視しようがそれこそお題目になるだけで、依然としてあやまった暗記教育が行なわれ、人間能力を

見失った教育が行なわれるであろう。ということは、三科目なり五科目なりの補習授業がおこなわれ、ごまかしの内申書が書かれ、学校格差は依然としてつくられてゆくということである。現代の教育界の人士は、教育委員会への通達を一片の空文に帰せしめる位のこととは朝飯前のこととしてやってのけることと疑いなしである。

むすび

社会的な現象としてみると、十人中七人以上が高校に入学するようになってきている現在、どうして新しい体制が考えられないのか。入学してからきびしくしつけ、方向をかえること、長く勉強させることなども考えてもよいではないか。そういう状態でも依然として選抜試験を考えなければならぬという思考こそ問題なのである。根底にあるのは教育観、テスト観であろう。それが教育を混乱させているので、入学試験が教育を混乱させているのではない。まして試験の科目数とか、方式とかの変更が、教育の混乱を救うのではない。われわれの教育観を改めることなしには教育の体質改善は成立しないであろう。教育の体質改善は結局のところ、われわれの自己革新である。

《プログラム学習研究所長》